



101st - volume



飛翔
HISHO

総合科学部

School of Integrated
Arts and Sciences

飛

翔とは、広島大学総合科学部がどんなところなのか、どんな人があるのか、どんな魅力があるのかを多くの人に知ってもらうための総合科学部公式広報誌です。今年度は101号ということで、あらたなフェーズを飾る第一号になるよう、編集員一同心を込めて作成いたしました。

H

ISHO is the official public relations magazine of the School of Integrated Arts and Sciences at Hiroshima University. It aims to introduce more people to what our school is like, who our students are, and what makes it so special. This year marks the publication of our 101st issue, signifying the beginning of a new phase. With this in mind, our editorial team has put great effort into creating a meaningful edition that will inspire readers to take their next step forward.

—飛翔 101号



『飛翔』は株式会社村上農園様のご支援を受けて発行しております。村上農園は、豆苗・スプラウトなどの発芽野菜の生育・販売で全国展開している、広島市に本社がある会社です。徹底した衛生管理でISO22000を取得するなど、最新鋭の植物工場で安心安全な機能性野菜を出荷し、また近年は海外展開でも注目を集めています。代表取締役社長の村上(旧姓田村)清貴様は総合科学部第6期生でいらっしゃいます。

▼村上農園ホームページ

<https://www.murakamifarm.com/>

『飛翔』 概要

Introduction to “HISHO” p.1

目次

Table of Contents p.2

巻頭言

Foreword p.3-4

総合科学科インタビュー

IAS Interviews p.5-26

教員インタビュー

Interview with the Professors in IAS p.5-14

在校生インタビュー

Interview with the Students in IAS p.15-24

卒業生インタビュー

Interview with the Alumni of IAS p.25-26

国際共創学科インタビュー

IGS Interviews p.27-36

教員インタビュー

Interview with the Professors in IGS p.27-29

在校生インタビュー

Interview with the Students in IGS p.30-32

卒業生インタビュー

Interview with the Alumni of IGS p.33-36

学生独自プロジェクト紹介

Introduction of Student-Led Projects p.37-41

編集後記・メンバー紹介

Editor's Notes & Introduction of “HISHO” members p.42-48

おわりに

Afterword p.49

巻頭言

やまだ

としひろ

山田 俊弘 先生

総合科学部長
大学院統合生命科学研究科 教授

Dr. Toshihiro YAMADA
Dean of the School of Integrated Arts and
Sciences
Professor
Graduate School of Integrated Sciences for Life



昨年、2024年は、総合科学部創立50周年にあたりました。総合科学部では、創立50周年を記念する様々な事業を盛大に執り行いました。在校生にも参加を呼び掛けたので、記念事業の場にいた読者もきっと多いことでしょう。

7月20日には、サタケメモリアルホールで記念シンポジウムを行いました。「世界で活躍するひろだいそうか」と銘打ったシンポジウムでは、世界で活躍中の総科卒業生にご登壇いただき、「活躍するために必要な力」について語っていただきました。

8月10日には、ANAクラウンプラザホテルにて、記念式典・記念講演会・記念祝賀会を開催しました。記念講演会では、ジャーナリストであり、ノンフィクション作家としてもご活躍中の堀川恵子さんのお話を聞くことができました。堀川さんにとって、人生の羅針盤がなんであるかを知ることのできた、圧倒的な講演でした。講演では、堀川さんの中で「総科」がどのように生かされたのかという話もしていただきました。

その後の記念祝賀会では、たくさんの総科卒業生にお会いすることができました。そして、彼・彼女たちの口から直接、総合科学の何がよかったのか、総合科学部で学んだ何が、卒業後に役立ったのか聞くことができました。

11月1日には、卒業生で紀伊國屋書店代表取締役社長の務めていらっしゃる藤則幸男さんに、記念事業の一環として講演をしていただきました。現代を生きるうえで、何を大切にしたいのか/すべきなのか、藤則さんのお考えを知ることができました。

奇しくも2024年は、広島大学全体から見ると創立75周年

に、また、最も古い前身校である白島学校が設立された時から数えると、ちょうど150周年にあたりました。そこで広島大学は全学をあげて、創立75+75周年を祝う事業を開催しました。そうした75+75周年記念事業の際にも、たくさんの総科卒業生に声をかけていただきました。

このようにして私の2024年は、たくさんの総科卒業生にお会いした稀有な1年となりました。こうした様々な機会に得ることができた、総合科学部卒業生の貴重な声を3つ、私のフィルターを介してしまいますが、紹介したいと思います。

卒業されてから時間がたっている人もおられましたが、皆、在学時がまるで昨日のこのように、生き活きと総合科学部での日々を語ってくれました。その中で、多くの卒業生が話してくれたのが、指導陣の素晴らしさでした。時には寡黙に研究へ取り組む姿勢を見せることで、あるいは雄弁に研究を語ることで、先生がたは学生の指導に当たっていたそうです。そうして学生たちは、何かを成し遂げるために必要な努力や知恵の絞り方を学び取っていったと聞きました。

研究で使用する技術や手法は日進月歩です。一方で、研究に対する思考態度は案外、今も昔も変わらないものだと思います。現役の総科教員として、かつての総科教員たちがそうだったように、教育者としてふさわしい思考態度で学生たちに向き合いたいと思いました。

二つ目に紹介したいのが、総科学友の多様性です。総合科学部には、異なる学問分野に興味を示したり、異なる学問分野を得意としたりする学生たちが集います。彼らが、

異なる専門をもつ先生たちに指導されるわけですから、学生の数だけ、異なる専門性が磨かれていくことになります。総合科学部学生間にある、興味のし好性と専門の多様性は、他の学部ではまず見ることはできないでしょう。

先輩達の活躍分野は実に多種多様で、このことも総科の大きな特徴となっています。先輩総科生たちは在学中、得意学問分野や専門学問分野を異にする友人と、同じ教室で机を並べて学び、お互いを刺激しあい、（全く異なる）お互いの夢を語り合ったと教えてくれました。そして、こうした刺激が成長の糧になったと先輩方は感じていました。この総科独自の空気感は今も受け継がれており、きっと、君たちも同じような学生生活を送っていると思います。ぜひとも、総科独自の多様性を身近に感じ、お互いに、たくさんの刺激を与え合ってください。

最後に紹介するのが”挑戦“です。シンポジウムに登壇した総科卒業生が口を揃えておっしゃっていたことが、「『越境する力』、『1歩踏み出す力』、『挑戦する力』が総科で得た一番の宝だ」ということでした。そして同様のことが、記念講演で堀川さんの口からも語られました。

総合科学部では、専門を究めること以外にも、周辺知識をどん欲に学ぶことを学生に勧めています。こうした経験は、他学部では限られています。総科卒業生たちはこうして、たくさんの新しい学問に触れることになりますが、その中で、専門学問分野間に共通性があることに気が付き、自分の専門・得意とする学問分野以外へ挑戦する気持ちを育んでいったそうです。

こうした成功体験は、卒業後に本領を発揮したそうです。総科時代の体験が、社会に出てから、「新しいことに挑戦する勇氣や一歩目を踏み出すことへの不安の克服」につながり、「いまでは、一歩踏み出すことに楽しみを覚えるようにさえなった」と多くの卒業生が語っていたことが印象的でした。言うまでもありませんが、こうした「挑戦する気持ち」が、彼・彼女たちを成功に誘いました。

多くの人の口から語られた、「『越境する力』、『1歩踏み出す力』、『挑戦する力』が総科で得た一番の宝だ」という意見について、「まるで自分の話を聞いているようだった」という感想が、記念事業に参加されたたくさんの卒業生から寄せられたときは、本当に驚きました。“挑戦”が総科のキーワードだったのです。

藤則さんは講演の最後に、「社会的な成功も目指して欲しい。君たちの成功が、次の世代の総科生の弾みとなるのだから」という趣旨のメッセージを、総科生に向けてくださりました。

堀川さんは講演で、「努力することは決してかっこ悪いことじゃない。努力を抜きにしては、何も成し遂げることができない」とも語っていました。私もその通りだと思います。君たちは、自分たちの人生を実り多いものにするため、この先、たゆまぬ努力を続けていくことでしょう。まずは、自分の目標達成に向けて、邁進してください。そしてできれば、君たちが将来、社会的にも大暴れすることを私に期待させてください。





桑島 秀樹 先生

大学院人間社会科学研究科 教授
人間探究領域 人間文化授業科目群

Dr. Hideki KUWAJIMA

Professor

Graduate School of Humanities and Social Sciences
Human Research Division: Human Culture

—誰でもできる「美学的な生き方」とは？

喜怒哀楽を 大切に

そして、感情を言葉にする
手間を惜しまない。

アイルランドと日本 インターフェイスと辺境を見つめる

—まず、美学とは何か、先生の研究分野について教えてください。

私の著書の一冊に『生と死のケルト美学：アイルランド映画に読むヨーロッパ文化の古層』（法政大学出版局, 2016年。第14回木村重信民族芸術学会賞受賞）という本があります。この本の表紙の写真（2枚の写真で、それぞれ冬の海と浜辺、夏の海と空になっている）は、私がアイルランド島の西部海岸の果てまで行って撮った写真なんです。装幀はプロの方がされたんですが、これは、言ってみたら海と陸／空の境界の写真を反転して組み合わせたデザインになっているのね。つまり、本のタイトルにもある通り、「生と死」とか、あるいは「海と陸／空」みたいな相反する2つの異なる世界を行ったり来たりするケルト的感性の表現

になっていると思っています。たとえば、ハロウィンもじつはアイルランド由来で、もっと正確にいうとケルトの文化なんだよ。ハロウィンは毎年10月31日にあるけど、この時期もある意味では夏と冬の境目だと言えます。ハロウィンは生者と死者の祭りで、日本で言えば盆踊りみたいなもの。盆踊りも、足を踏み鳴らして広場で踊って死者を招く。つまり、「境目＝インターフェイス」になっているところに、そのちょっと不思議な時間が生じるわけなのです。二律背反する世界あるいは時空を行き来する物語、伝承といった文化はアイルランドと日本で共通していますよね。

辺境感性の「痛苦反転」 あるいは 崇高の美学

—かわりがあるようには思えないアイルランドと日本が共通点をもつのはどうしてだとお考えですか。

アイルランドと日本とは、ユーラシア大陸の西と東の辺縁部に位置している点で共通していますよね。文学的には「あいるんど」や「愛蘭土」とも表記されてきたアイルランドという国は、遠くに行ったことがないけど頭のなかで想像するような夢の国っていう存在。このような存在論と呼応して、辺境の感性みたいなものに結びつく。

つまり、中心が文明の発達してきたところだとしたら、際（きわ）や周縁部はたんなる田舎というより、野蛮な民が住む土地というやや偏った——文明価値観が時に見られます。「都市／文明」の展開する場所っていうのは、大きな河川に面したところとか肥沃な大地と平原があるようなところとかであるわけだけど、そうした都市を形成しなかった「辺境／野蛮」と見なされた場所に生い育った独自の文化や技芸の面白さこそが、アイルランドや日本に溢れているものだと思います。

そのような意味では、「都市／文明」のまなざしによって過小評価された「辺境／野蛮」のマイナス性（＝痛み）をプラスへと価値転倒する。つまり、「痛苦反転」の地政学的美学がここに認められるわけなのです。これが、18世紀のアイルランド人E・パークの考えた「崇高の美学」の原理でもあるんです。

▼在アイルランド丸山則夫日本国大使公邸での晩餐会の後で（大学・ミュージアム関係の友人たちと）。右から3番目が桑島先生。



ノスタルジーと 「故郷の美学」

—「辺境の美学」以外の切り口からも美学について知りたいです。

「辺境」への感性ということを別の角度から話しま

しょう。ノスタルジー（郷愁）とか故郷への想いとか、ある場所への懐かしさや愛着の感情についても、すごく興味をもっていますね。たとえば、自分が馴染んだ土地に対し、その土地をなんらかの理由で離れたり、失ったりして、初めてある種の懐かしさや愛着の感情を持つようになる。そういう意味では「大人」にならないと味わえない特別な感情かなと思うんですよ。あるいは、宗教戦争のように、帰りたくても帰れない土地やフクシマのように核物質で汚染されて帰れなくなった土地もある。そういう土地こそが故郷、あるいは自分にとっての聖地だとする感性もここに関係してきます。時間的な経過にもとづく「昔」への懐かしさもあります。たとえば、「昭和ノスタルジー」なんて概念もあります。これは、昭和を生きていない今の大学生にも実感させるものがあるんじゃないかな。映画『ALWAYS三丁目の夕日』（2005年）に対する鑑賞体験とかね。そういう時代に生きていないのになぜ懐かしいんだろう、っていうことを考えるのも、「ノスタルジーの美学」という感じね。「縄文時代が懐かしい」とは言わないけど、お父さん、あるいはおじいちゃんぐらいが生きた時代、だから30年から50年くらいのスパンだったら懐かしさって感じられるものがあるでしょう。そのあたりの感覚の深い考察ですよ。

▼桑島先生の直近の活動。2025年1月東カリブ・旧英領セントヴィンセント島でカリブ族族長・地元近代史家・公文書館専門員らとフィールドワーク。



土地の歴史を語る 「まち」をつくる

—先生がされている総合科学的な研究について教えてください。

司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズをネタに、近著として『司馬遼太郎 旅する感性』（世界思想社、2020年）という本を出したとき、その冒頭に「……街道はなるほど空間的存在であるが、しかしひるがえって考えてみればそれは決定的に時間的存在であって、私の乗っている車は過去というぼう大な時間の世界へ旅立っているのである。」（「湖西のみち」,朝日文庫版 28頁）という彼の言葉を引用したんですけど、ここにあるように「みち」は、空間的、時間的な要素をはらんでいるんですね。

こうした「みち」という複雑な歴史的かつ文化的なレイヤーをもつことまで考慮して「まちづくり」を考えてみる。こんなふうに「みち」や「まち」を「語る」ことを大きなテーマに総合科学的な研究もしているんです。たとえば、「みち」の時間的側面について考えるとき、そこは歴史的なレイヤーが重層的に重なっているから歴史学の先生を呼んだり、土地にも着目しているから地質学に詳しい先生を呼んだり、そしてそれを語る語り口っていうのは文学とかかわっているから文学の先生を呼んだりして一緒に考えてみる。

あとは、こうした「まちづくり」の仕掛けを現場で考える際に、東広島市周辺でエコミュージアムとかに関わっておられる地理学・生物学でフィールドに出ている先生、市立美術館の館長さん・学芸員さん（桑島ゼミの修了生でもある！）、地元で活動しているアーティストさんらと一緒に、美術館と博物館、エコミュージアムみたいなものを念頭に、地域に根ざした「ミュージアム」のもっている未来の「まちづくり・ひとづくり」の可能性を模索するシンポジウムを企画したりもしています（2021年11月開催「美術館×広島大学×アーティストの共演：感性知を活かす市民づくり・街づくり」、新・人間社会科学研究科設立記念セミナー第1回。※2022年12月発行の紀要『総合科学研究』第3巻に最終報告掲載）。

—気軽な
「学問分野」の飛び越えが
創造的未來につながる

—総合科学部にはどんな魅力があるとお考えですか。

ほかの学部だときちんとした専門分野の縦割りで訓練を積んでいくことが多いと思うんだよね。そこが総科の最大の魅力かな。逆に言えば、時と場合によっては、総科は専門性の掘り下げや積み上げが弱いって言われてきたことと表と裏かもしれないけど。むしろ分野にもよるけど、同じテーマを探究している人の層の厚みと、それぞれの掘り下げの深さの点で、ね。

だけど、われわれの総科だったら、従来の掘り下げを重視する分野ではできない—ある種の創造的な！—一飛び越えも気軽に経験できるし、それは今の時代（さらに未来）を生き抜くのに有効では？

「経験・感情」 を言葉にしてみる

—美学的に生きていこうとするときのヒントを教えてください。

僕のやっていることって生きている一個人の主観とか経験とかと深くかかわる、感情体験や感動体験みたいなものを大切にする学問なんです。それらの経験って、やっぱり言葉になかなかしづらいことだと思う。だからあえて言葉にするっていう作業をみんなができるようになると少し幸せに生きられると思っているんですね。

もちろん、人それぞれにいろいろな人生があるので、苦しさや喜びがぜんぶ分かるわけじゃないんだけど、人生の喜怒哀楽みたいなものを大切にして生きていくことが「幸せに生きる＝生の充実」には重要な、と。そういう「感性」についての思考ができるようになってくると、辛さや痛みを辛さや痛みとしてちゃんと引き受けることができるいう意味でも、「幸せに生きる」ことができるんじゃないかな。

だから僕は、自分が生きているって実感を丁寧に言語化していったり整理してったりする作業が大事だと思う。そういう生きるモチベーションとかと繋がるような思考の仕方を学ぶこと、それが「美学＝感性の学」なんですよ。

主指導教員の先生選び

—まず会ってみる、
書いたものを読んでみる

—学生に向けてメッセージをお願いします。

総科の皆さんに伝えたいのは、たとえば、「美学」みたいな高校までに教科として学ばなかった学問分野もあるから、皆さんが専門領域とか卒論の主旨の先生とかを選ぶときには、その先生の研究者総覧とかちゃんと見て、気になったら著書や論文とかも探して読んでみてね。もちろん、興味ある先生は、ちょっと面接をお願いして先生のキャラクターや雰囲気も知っておくのも、とっても大事。一、二年生は特に、ね。だから自分の美学じゃないけど、直感的なところも含めて、専門とか指導教員とか選ぶほうが、いっそう楽しく充実した学生生活になるんじゃないのかなと思います。

ひとり時間も大切に
孤独と社交のバランスを！

もうひとつ、学生のみなさんに言いたいのは、「孤独」になる時間みたいなのを作ってみるのもいいんじゃないかな？社交もある程度人間にとって必要不可欠で、もちろん社交の喜びってある。だけど他方で、一人で部屋にこもって何かに没頭・集中するとか、あるいは、旅に出てどこかの知らない土地の景色をボーっと眺めてみるとか、そういう時間の確保は、学生じゃないとなかなかできなくなるんですよ。

だから、大学の図書館で読書に没頭するとか、下宿から窓の外の風景をぼんやり眺める程度でもよいから、ちょっと（精神的に）一人になる時間を作ってみたら、と。とはいえ、学生生活ならではの「社交」も大切。孤独と社交、この2つのバランスをうまくとれる訓練を、ぜひ学生生活のなかで試してみてください。一生涯「生の充実」に役立つ思考法になるかも。

▼取材後の一枚。



—取材担当 小原優太 小林孝成 木谷優花

・まず、私たちが桑島先生に取材した理由は、教授の専門分野である美学という分野が一体どういったものなのか想像がつかなかったからです。また、先生はアイルランドについて深い造詣をお持ちですが、どのような経緯から彼の国に関わられたのかを知りたかったからです。実際に取材を通して、教授の生い立ちのお話から研究する対象の変遷まで、話はさまざまなところまでおよび、非常に興味深いインタビューになりました。さらに、研究のみならず、教授は積極的にいわば研究室を飛び出し、街に繰り出したり世界を渡り歩いたりしながらかご活躍されておられるようなお姿を拝し、まさに総合科学を体現されている方だと実感しました。教授とじっくりお話しする機会はそうそうないので、取材を担当した編集員一同にとっても貴重な機会でありました。

・取材を終えて、まずはとっても楽しかったなと感じています。お話をしていく中で桑島先生のアイルランドの世界、美学の世界にどんどん引き込まれていく感覚がとても印象的でした。先生のお話を聞くという機会はなかなかないと思うのでこのような経験ができたのは飛翔に入ってみてよかったなと感じることの一つです。

▼桑島先生のご活躍は様々な媒体で見ることができます！

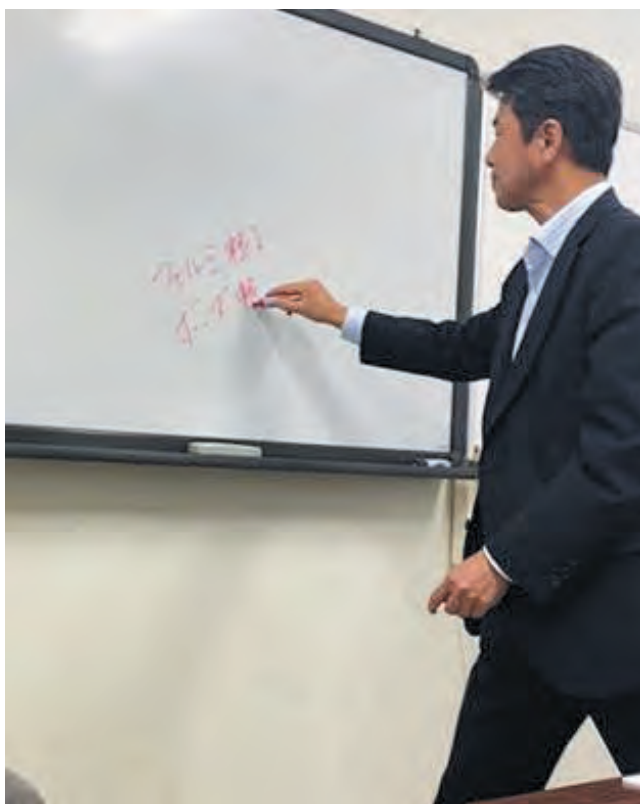
『飛翔96号』

https://www.hiroshima-u.ac.jp/system/files/141524/03_%E9%A3%9B%E7%BF%9496%E5%8F%B7%EF%BC%88%E6%95%99%E5%93%A1%E7%B4%B9%E4%BB%8B1%EF%BC%89.pdf

「広島大学・研究者総覧（桑島先生分）」

<https://seeds.office.hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.b7d3137636244a39520e17560c007669.html>





東谷 誠二 先生

大学院先進理工系科学研究科 教授
自然探究領域 物性科学授業科目群

Dr. Seiji HIGASHITANI
Professor

Graduate School of Advanced Science and Engineering
Natural Sciences Research Division: Material Sciences

—研究の難しさ、
そして乗り越えるコツ

壁にぶつかった時こそ、
考え続けることをやめない。

—先生の研究分野について教えてください。

超伝導・超流動の物理を理論的に研究しています。量子力学によると、自然界に存在する粒子は2種類に分類できます。一つは仲間と同じ行動をしたがるボーズ粒子（ヘリウム原子など）、もう一つは同じ行動をすることを嫌うフェルミ粒子（電子や中性子など）です。超流動っていうのは、協調的な性格をもつボーズ粒子の集団が足並みを揃えて運動する現象です。人間もそうだけど、自分だけ勝手な行動をするのは勇気がいるし、エネルギーがいることですね。ボーズ粒子たちも、できるだけ場を乱さないように運動しようとする。だから、ボーズ粒子が集団で同じ運動を始めるとその流れがずっと保たれて、非常に狭い隙間でもスルスルと抵抗なしに流れていく。それが超流動。超流動現象は液体ヘリウムで実際に観測されます。超伝導は電子が示す超流動のことで、金属中の電子が電気抵抗なしに流れる現象です。けどもともと電子は、協調性のないフェルミ粒子。だからみんな同じ行動をとることを嫌うのだけど、温度がすぐ

く低くなると、電子同士がペアを組んでボーズ粒子化するんです。その結果、超流動状態と同じような状態になる。超伝導現象は多種多様な物質で観測されています。また、同じ物質でも、その内部と表面付近では、非常に異なる超伝導状態が実現します。そういった多様性は、超伝導の物理をとっても豊かで魅力的なものにしています。

—超伝導・超流動現象に興味を持ったきっかけを教えてください。

まず、理論物理の面白さを知ったのは卒業研究のときでした。4年生になるときに、実験が苦手というそれだけの理由で理論系の研究室を選択したのですが、それが結果的に今につながっています。4年生の頃は知識不足のために研究は順調には進まず、卒論はちょっと中途半端になってしまったけど、新たな知識を吸収しながら課題をクリアしていく研究の過程がとても楽しかった。それでもっと研究がしたいと思うようになって、大学院

に進学しました。卒論は磁性の分野で書いたのですが、大学院では別のことをやってみたいと思い、超伝導の勉強を始めました。そして超伝導関係の論文を読み、さらにそこに示されている参考文献を読み、さらに…、という終わりの見えない作業を繰り返しているうちに、超伝導や超流動の理論にハマっていったという感じがすね。

—超伝導や超流動のどのような点に魅力を感じますか？

超伝導の理論というのは、勉強すれば勉強するほど、すごく綺麗な理論だなと思うんですね。まず、そこに魅力を感じます。理論物理学者がよく「この式は美しい」とか言うけども、大学院に進学するまではそんなふうに式を見たことはなかった。でも、M1の終わりぐらいに超伝導の理論体系っていうのが理解できるようになった頃に、それが美しいと思えるようになった。格好よく言えば、その背景にある数理構造の美しさが超伝導・超流動の一つの魅力です。何をもって美しいと感じるのかはうまく説明できませんが、それは少なくともその綺麗な理論から何かがすぐにわかるという類のものではありません。よく整った理論的な枠組みを使ったとしても、かなり泥臭い計算の後によく目的の結果が得られるのが普通です。これは超伝導・超流動の研究に限ったことではありませんが、そういう複雑な計算も含めて、理論に愛着を感じるのが理論物理をやっている人の特徴です。複雑な計算が必要であるということは、理論がたくさんの解を内包しているということも意味しています。その中には、我々がまだ知らない現象が隠れているかもしれません。実際にそういうものを発見することがあって、僕自身も何度かそういう経験をしました。そのときは、世界でこのことを知っているのは俺だけみたいな優越感に浸れます。

気になるあの先生の学生時代

—先生は大学生の頃どんな学生でしたか？

あまり自慢できるような学生じゃなかった（笑）。高校の頃は大学へ行きたいという強い意思はなくて、

部活ばかりやっていた。研究者になるなんてその頃は考えもしなかった。大学でも3年生までは、部活中心の生活を送ってました。研究者になりたいと思い始めたのは、卒論で研究の面白さを知ってから。それで大学院に行こうって決めて、博士課程まで進学しました。大学院での5年間は研究に没頭しました。

▼東谷先生が学生時代にお世話になった本だそうです。



学問の成長とともにある研究人生

—先生が今されている研究の内容を教えてください。

研究の柱としているのは超伝導の界面物性で、これは博士号取得後に最初に書いた論文がベースになっています。超伝導物質の内部ではなくて、界面（物質の表面や他物質との接合面）に注目したのは、人とは違うことをやりたかったからです。今思うにそういう選択をして正解だったなと感じています。僕が大学院で研究していたころは超伝導体の界面の研究はマイナーな分野でしたが、研究分野の人気は時代とともに変わるもので、今はむしろ界面に着目した論文のほうが多くなってきた感があります。大学院時代から、この分野が大きく成長していく様子を間近でみてきて、ようやく自分の研究に世の中が追いついてきたなっていう偉そうな感想を持ったこともありましたね（笑）。博士号を取ってすぐに書いた論文は、今でも一番お気に入りの論文です。今は大学院の学生と一緒に、カイラルエッジ状態と呼ばれる超伝導体に特有の表面状態に関する研究をしています。

—先生にとって研究がどんなものか教えてください。

僕は研究っていう行為自体が好きなんです。勉強はあまり好きじゃなかったけど(笑)。

—勉強と研究は違うんですか？

違いますね。もちろん研究を進めるために本や論文を読み込んだりします。その作業を終えたときはそれなりの達成感を覚えますが、それは既知のことを自分なりに消化できたということにすぎません。何か未解明の問題があって、長い時間をかけてようやく満足できる結論に行き着いたときの達成感は桁違いです。スポーツ選手も大会に向けて基礎練習を積み、試合に勝つための技術を身につけていきますが、研究の過程でする勉強はこれに似ていると思います。

研究で行き詰った時は？

—とにかく考え続けるしかないと思います。

—研究の途中で行き詰った時はどうやって乗り越えられてきたのか知りたいです。

研究していると大抵どこかで行き詰まります。そういうときはとにかく考え続けるしかないと思います。考え続ける…そうしてトライ＆エラーを繰り返していると、いろんな情報(僕の場合は数式の断片)が頭の中に蓄積されていきます。そうなってくると、寝てるときでもいろいろ考えることができるようになります。で、朝起きたときに何でこんなことに気づかなかったんだろうと思うときがあるんですよ。そういう経験はズーっと考え続けてないとできない。大学でめちゃくちゃと計算していて、もう今日は帰ろうと車を運転しているときに、あ、って思うときもある。そういうひらめきは、やっぱり考え続けた結果出てくるもので、これまでそういう経験を何度もしました。行き詰まったときにそこから抜け出す魔法はたぶんないので、何か解決策があるはずだと信じて、いろんな可能性を考えて試行錯誤する。そのうちそれらの情報が頭の中で整理され、その結果、ひらめきが生まれるということではないでしょうか。実際に頭の中で何が起きているのかは知りませんが。

選択肢を広げる学びを、 ここ総科で。

—色んなことを勉強して、色んな人に関わってきたからこそできる。

—総科生に向けてメッセージをお願いします。

僕が伝えたいのは1つで、総科のシステムを活用して是非いろんな授業を取って欲しいということですね。総科で色々学んでいると、将来の選択肢がすごく広がります。実際、大学の教員になった総科出身者の中には、学生時代とは全く違う研究分野で活躍している人もいます。就活では、どの分野に就職していいかわからないという贅沢な悩みを持つこともできます。ほんとに選択肢が広がる。それは、色んなことを勉強して、色んな人と関わってきたからこそできることです。



—取材担当 國光優大 岸上栞菜 香本凜 木谷優花

理論物理の世界にもとまじみのあったメンバーもなかったメンバーも、先生のお話に引き込まれ取材の時間はあっという間でした。こうして取材を通して自身にとって新たな学問の世界をのぞけることは、『飛翔』ならではの大変貴重な経験になったと感じています。また、実際に研究者として活躍されている先生の姿勢や態度、生い立ちなどのお話は普段なかなか聞くことはできないので印象深かったです。

東谷先生、ありがとうございました！

▼取材後の一枚。





貝賀 早希子先生

大学院人間社会科学研究科 准教授
社会探究領域 地域研究授業科目群

Dr. Sakiko KAIGA

Associate Professor

Graduate School of Humanities and Social Sciences
Social Studies Research Division: Area Studies



—100年前の
手紙から
歴史を読み解く。

—先生の研究内容を教えてください。

私の専門は国際関係の歴史です。だいたい百年ぐらい前のことをやっていて、イギリスをメインに、国際連盟っていう今の国連の前身のあたりを専門としています。基本的には戦争をどう防ぐかみたいな話について、当時の人たちがどんな議論をしていて、実際にどうやって国際連盟に組み込んでいったかっていうようなところを中心に研究しています。

戦争研究にも色んな視点があって。一番多いのは現代政治の分析だけど、戦争に関わる精神分析みたいなことをやってる人もいれば、軍事の話をしてる人もいるし、Economic History の分野で、完全にデータ分析で論文を書いている人たちもいる。

まあただ私は歴史家なんだよね。なので、メインは百年くらい前の人たちが書いた手紙とか、残した文章とかを読んで、それをもとにして研究してる。だからその怪しいんだよね。歴史の方にいくとちょっと政治っぽいみたい言われて、国際政治とかに行くと、え？歴史家の人だよ、みたいな。

—手法は資料とかの分析になるんですか？

そうだね。資料館に行って、写真を撮ったり、メモしたりして、それを読んで分析するっていう。イギリスはもちろん色んなところを見たけど、その他にもジュネーブとか、アメリカにも結構色々行ってるかな。

—特定の国の研究をするとなっても、資料は色々な場所に散らばってるってことですか？

うーんとね、まあ散らばってる。良い質問だね！じゃあ例えば私が外交官だったとして、私が持ってた個人文書とか手紙とかは、貝賀ペーパーっていう名前で整理されているところには残ってるのね。100年前のことだから、私が手紙を書いたり文章を作ったりして他の人に送るよね。そうすると私が書いたものが、別のところにとってあったりするでしょ。

あと、単純に資料をまとめきれない。〇〇ペーパーって分類されてると研究者にとってはわかりやすいから、それで資料を見つけて来るのがメインだけど、こんなところにこんなペーパーが？！みたいなこともなくはない。この時にこの人とすごく議論してみたんだか

ら、この人とのやり取りが残ってるかも、と思ったらその場所に行ってみたりとか、そういうことはある。

ただやっぱり国によって、イギリスとかアメリカは整理されてるけど、イタリアとかは基本的にわからんのよね、ごちゃごちゃなわけよ（笑）。だから研究するのはすごい大変で。フランスとかも結構大変だね。国によって資料を取っておく文化、整理する文化があるかどうか全然違うんだよね。綺麗になってる方が珍しいのかもしれない、とは思う。

—他の研究とどう差別化されているのですか？歴史の研究は、話題が被ったりしそうなのですが。

私の分野だと、同じようなことに興味ある人って同じニュースを見てるし、みんな同じときに同じようなことに興味があったりするから、トピックがかぶることはよくあるんだよね。昔は心配したかもしれないけど、今は手法とか分析に自分なりのものがあるってわかっているの、トピックが同じでも、手法や分析の仕方がかぶったりすることはないのかなと思っていて。私の場合は、**深く、その時生きてた人たちがどんな議論をしていたかってことに一番興味があって深く見てるのね。**この時にこの議論でこういう話までされてたとか、それが本当はこっちにつながっているとか。

—手紙から歴史を読み解くとなると、人と人とのやり取りになるわけじゃないですか。その1つの資料から、どれだけ深く読み取るかという部分が、先生が感じてらっしゃる面白さですか？

そうだね、確かに色々読んでるとその人のパーソナリティーがあったり、国によって状況が違ったりして、同じ話をしてたのに国によって解釈が違うってことがあるのは面白いね。あと、時間と共に意味が変わっていくんだよね。**歴史って面白いのはそこだね、変わっていくところ。**だからそういうものを追っていくのが楽しいことのひとつかもしれないね。

—100年前の資料を見ていて、実際はどうだったかわからない部分ってあるのではないかと思います。そのギャップを、先生のような研究者の方が分析される上でどう埋めているのかお聞きしたいです。

歴史に限らず日常生活において、何かしら、必ず解釈は入ってるじゃん。これが真実だって主張する先生もいると思うけど、それは分析でもあり、ある種解釈でもある。ただ私の場合は、国際関係のことを考えるから、その出来事なるべく大きな、国際関係もしくは国際社会で、**長い目で見たときにどんな意味があったか、っていう方に繋げてみたいかな**っていう。そういう視点で分析してるかな。

えっ、戦争 ダメなんじゃないの？！

—戦争っていうのが、そもそもなんで規制されたかっていうことを調べたいなと

—国際関係の歴史を研究をしようと思ったきっかけがあれば、教えていただきたいです。

なんで研究者になったかっていうと、きっかけでいうと、わかりやすいのは9.11。9.11の後って、アメリカが一方的に攻撃して戦争が始まるわけね。そのとき私、日本育ちのティーンエイジャーで。

みんな日本で育ってるとさ、「戦争っていうのは、なにがあってもやってはいけない！」みたいに言われて、刷り込まれるでしょ。だからそれが正しいって思ってたのに、あれ（9.11とその後の戦争）があったとき、日本でも、私が見た限りね、メディアでもなんでも、「武力行使してて悪い」って話になんないの。**えっ？！戦争ダメなんじゃないの？！**みたいな（笑）ね。だからそこから、**戦争っていうのが、そもそもなんで規制されたかっていうことを調べたいな**と思って。それで研究者になったんだよね。ただ、私の世代は9.11がきっかけで研究者になった人がすごく多くて。だから私はその見方をモチベーションにしてるかな。日本で育って、戦争についての日本での考え方、言説を受けた上で9.11を見た人間として、戦争を国際関係で考える研究をするっていう。1つのきっかけとして、あれ（9.11）ってやっぱり我々の世代には大きいことだったんだなと思う。

—僕たちにとってはそれがそれこそウクライナだったりガザだったりするかもしれないですよね。

政治の話と犠牲の話に ミーティングポイントを —そういう意味でも広島はね、 やっぱ重要なんだよね。

—先生が広島大学で働かれていて、研究されている分野と平和との繋がりに何か思われることはありますか。

欧米で勉強していると原爆って必要だったと、今でもそう言うんだよね。欧米から見ると、日本が帝国主義で拡大して、中国や韓国を攻撃して、植民地化して戦争になったと。その最後の帰結として、終わらせたのが原爆、ってというような話なの。

日本だとさ、原爆のことにしてもなんにしても、犠牲の話ってというのが前に出てきて。犠牲で戦争っていうのは良くない、それも、実はすごい力強いものなんだと思う。犠牲学ぶのももちろん重要なことで。でも、なんで起きたのかっていう部分をわからないで、戦争を防げるのかって、私は防げないんじゃないかなと思う。だからこそ、お互いにちゃんと政治の話と、犠牲の話でミーティングポイントがあった方が良くないかな と思う。そういう意味でも広島はね、 やっぱ重要なんだよね。

—私は総合科学に、平和に通じるものを感じていて。先生は戦争について考えていらっしゃる中で、総合科学とのつながりを感じることはありますか。

私の周りの人たちもずっと言ってることがあって、本当に1番大事なものは人々の教育なんだよね。教育が上手くいって戦争は良くないって風になれば戦争は無くなるはずだっていう考え方ね。ある種の世論教育、平和教育が出来たら本当は1番良いと。^{[1][2]}

だけど1世代じゃ上手いじゃない。2世代3世代って教育をちょっとずつやって行くしかなくて。でもその間に何かあった時のために最終手段としての武力行使は必要かも知れない。武力行使は、セーフガードなのね。だから、本来は実行しようと思うと、必要なプロセスが色々あって。

でも、今私1930年代の話を論文で書いてるんだけど、その時も、教育とか必要なプロセスの前提を飛ばして、いきなり武力行使とかの話が強くなっちゃってるのね。そうすると、誰も安心できないから、結局戦争が終わらないっていうジレンマに陥ってしまうよね。

—武力がそもそもどういう位置付けなのかみたいな、

そういう本質をちゃんと見るのが平和のために大事ということですか。

そうだね、本質というか、そのプロセスを飛ばさずに埋めるとかだと思うんだけど。それって難しいよね、ちろん。でも、国際交流の議論も、総合科学の話にもつながるけど、違う視点をちゃんと聞けるかみたいな寛容さが大事で。国際社会にも一応ルールはあるけど、慣習も価値観も違うから。

全く知らないと、お互い何やってるのかわかんないから、なんかよくわかんないこと言ってるやつだ、みたいになるけど、ちょっとでも知っていると、こういう感じの考え方なのかなって思えるし。総科って割とオープンで、先生方も話しやすいし、そういう意味ではすごく良い環境だよ。色んな視点を見られるからより寛容になれるというか。寛容の一步でもあるのかなと思う。

総科での学びは 寛容の一步に

—ちょっとでも知っていると、こういう考え方なのかなって思えるし。そういう意味ではすごく良い環境だよ。

—取材担当 本田紫苑 岩木佳子 川原直生

取材を通して、貝賀先生が本当に研究を楽しまれているということがよく伝わってきました。

政治や国際関係から見た戦争の話と、日本で強調されてきた犠牲の話にミーティングポイントが必要だというお話には、広島で平和教育を受けてきた1人として、共感する部分が大きかったです。

また、総合科学部という場所で学ぶことが、異なる立場や分野への理解を深めることを通して、寛容の一步になり得るというお話は、総合科学を学ぶ私たち学生にとって、大きな意義のあるメッセージではないかと思いました。

貝賀先生、ありがとうございました！

輝く総科生にインタビュー STUDENTS ★ INTERVIEW

かたぎり もえ

片桐 萌絵 さん

総合科学部 総合科学科 2年
社会探究領域
社会フィールド研究授業科目群

「人がすき」— 活動に秘めた共通する思い

Q. 総合科学部では2年生になって専攻が決まると思いますが、現在どこに所属していますか。

社会探究領域の社会フィールド研究授業科目群というところに所属しています。私は地域おこしや町づくりに興味が、将来は地元で起業したいと思っているのでこのコースを選びました。同じ志の人と出会えたり、自分の専攻以外の授業も取れたりして、視野が広がり深まる点がいなと思っています。あとは、いざというときの人生の保険として地歴・公民の教員免許を取るための勉強もしています。

Q. 将来は起業を考えているというお話がありましたが、具体的にはどのような分野での起業を考えているのですか。

私は小さいころからお祭りなどの民俗芸能が大好きで、自ら催し側やお客さんとして関わる中で、お祭り関係で起業したいと思うようになりました。今は卒業と同時に地元である愛知県の新城市で起業することを考えています。

Q. お祭りに興味を持ったり、主体的に何かをしたいと思ったのはいつ頃ですか？

中学生の時です。私の地元「花祭」っていうすごく歴史の長い有名なお祭りがあるのですが、自分が大人になった時に続いているのかなとか、このままだとなくなっちゃうんだろうなとか思って。私自身、そのお祭りが本当に好きで、それを守りたいっていう思いから「とらでいっしゅ」という団体を立ち上げました。地元のお祭りがなくなってほしくないというのが一番の思いです。



▶ 片桐さんが2023年に設立した「とらでいっしゅ」のロゴ。民俗芸能の価値ある「伝統」を第一に尊重しつつ、たくさんの人にもっと気軽に民俗芸能を楽しんでほしいという思いが込められているそう。

お祭り×地元

地元での起業にこだわる理由を聞きました！

Q. 「とらでいっしゅ」についてもう少し詳しく教えてください。

とらでいっしゅは2023年の10月24日に立ち上げました。キャッチコピーは「民俗芸能を日本のポップカルチャーにしたい」。民俗芸能やお祭りって聞くと、古臭いってイメージが今の人にはあるのかなと思って。もっとポップな感じ、例えば映える写真が撮りたいからお祭りに行くとか、浴衣が着たいからお祭りに行くとかそういう気楽なテンションで楽しんでほしくて。だから、とらでいっしゅにはお祭りをいろんな人にとってもっとなじみ深いものにしたいという思いを込めています。お祭りが地域の人だけのものじゃなくて、海外の人も含めて分け隔てなく、いろんな人が楽しめるものにしたい。「とらでいっしゅ」としての基本の活動は、民俗芸能やお祭りの保存会の人たちに対してコンサルティングすることです。具体的には、担い手不足の解決や収益化のノウハウなどをアドバイスして、廃れかけている文化を立て直して”民俗芸能・お祭り専門コンサルティング”が基本業務になります。お祭りって、観光客がたくさん集まっても実際にする人がいないと成り立たないから、特に担い手の募集に力を入れているのが「とらでいっしゅ」の特色です。



◀片桐さんがビジネスコンテストで用いたスライドをお借りしました。片桐さんの祭りに対する深い愛と熱い思いが伝わってきます。

Q. 民俗芸能・お祭りのコンサルティング業務をする上で気を付けていることがあれば教えてください。

これまで、いただいた相談をもとに何件かコンサルティング業務をしてきました。第一に私自身がお祭りが大好きで観光客側にまわることもあるし、地元のお祭りでは担い手もしているので、両サイドの思いを理解していることが自分の強みかなと思っていて。担い手側はお祭りを自分たちのものだけにしたいというプライドや熱い思いをもっている一方で、観光客の人は担い手たちの結束したウチの雰囲気に入って行きづらいつ感じている。だから、コンサルティングをするときは丁寧な言葉で「とらでいっしゅ」のニーズを伝えて、お祭りの担い手側のプライドを尊重しつつ、今の社会に合った形に変えていけるようにアドバイスすることを気を付けています。

「楽しむ」「愛す」「守る」 全てにおいて 第一線にいることの強み

Q. 「とらでいっしゅ」の活動やお祭り愛好家としての活動を通して、楽しいことや生きがいに感じるのはどんなことですか？

お祭りに行って写真を撮るのがすごく好きです。お祭りって、歴史があって衣装も素敵でイベントとしてすごく映えるものなのですが、それ以上にお祭りに参加している人の顔ってとても生き生きしてて、それを撮るのが楽しいです。みんなもう人生の最高点みたいな顔をしているから。

Q. 「とらでいっしゅ」のインスタグラムを拝見しましたが、「人生の最高点」というワードが本当にぴったりだと思いました。皆さん本当にいい表情されていますよね。

大の大人が涙している瞬間とかもあって。そういうのを見ると、「人間っていいなあ。」って思うんですね。

▼「とらでいっしゅ」の公式インスタでは、片桐さんの思いのこもったお祭り訪問記を読むことができます。どれもお祭りへの愛があふれていました！記事末にリンクもあります。



Q. とらでいっしゅ以外にもいろいろとご活躍されていると聞きましたが、他の活動についても教えていただけますか。

総合科学部の学生独自プロジェクトとして、「ひがしひろしまフリーコーヒー」の代表者を務めています。何気ない道端とかでコーヒーを配って、そこにふらっとやってきた人同士が会話を楽しめる機会づくりが主な活動内容です。ずっと感じてきたこととして、地域おこしやまちづくりのためのイベントやセミナーが行われているけど、そういうところには実際意識の高い人しか参加してなくて。でもまちづくりって、どんな人の声も拾っていかないとその地域に生きている全員が幸せにはなれないよなって思うんです。だから、フリーコーヒーでの偶発的なで出会いを通して、いつもは拾えなかった人の声を拾えたり、地域の人の地縁が深まったらいいなって思っています。あとは、広大生が地域の人と関わる機会ってあんまりないのがすごくもったいないなと思って、広大生と地域の人がつながる場にもしたい。だから東広島でフリーコーヒーをすることはすごく意義のあることだと思っています。

(学生独自プロジェクト「ひがしひろしまフリーコーヒー」の特集はp. 41)

▶「ひがしひろしまフリーコーヒー」のメンバーとの一枚。東広島中を飛び回って、コーヒー片手の気軽であったかい縁をたくさん生んできたそう！



大学生活を過ごす西条だから気づいたこと

実は他にも、「派遣大学生」という取り組みをしています。これは、大学が周辺にない小学校に赴いて授業をするものです。地域に大学がないのが理由で子どもたちが大学や大学生について知ったり、関わったりする機会がないのはもったいないなと感じていて。この前は、「大学生は大人？子ども？」というテーマでキャリア教育をしました。

あとは地元の新城市若者議会に参加しています。これは市議会の若者版で、政策を出して予算が通ったら、実際に市政に関わることができるというものです。今は子育ての政策を出そうとしています。これは若者が子育てについて何も知らなかったり、地域の子供と大人世代が関わる機会が全然なかったりという問題点から生まれたものです。現在、実際に新城市にある図書館で、地域の大人が子供たちに向けて読み聞かせをするという事業を実現させるために、図書館のキッズスペースをリノベーションする政策を考えています。

Q. わらじ何足はいているんですか(笑)、活動の幅の広さに圧倒されます！いろいろと活動されている中で、何かつながりを感じる部分はありますか。

今のところ4足ですかね(笑)。ぱっと思いついたのは、全部「人がすき」っていうところから活動が広がっていった気がします。

Q. 片桐さんとお話していて、社会を見る目がすごいなって感じています。自分が好きなことや守っていきいたいこと、片桐さんの場合だったらお祭りに対して批判的な視点も持つ、その力はどこで培われたんだと思いますか？

実はずっと前からこんな突っ走ってる人間だったわけではなくて。大学に入学したらこれがやりたい！っていうものがあつたわけではなくて、大学1年生の夏に一人旅とか色々してみたのですが、そこで自分が身を置く環境が大事なんじゃないかってどれだけ動くかが大事なんだってことに気づいて。人生観が大きく変わりました。いろんなものや人に会う中でちょっとずつ自分が刺激されて変わっていったって感じです。

Q. 総科での学びは自分の活動にどんな影響を与えていると思いますか？

専門を固定しすぎないのはよかったなって思ってます。いろんなことに興味があるタイプだから、広く深く学べる総科は自分にぴったりだなって感じます。あとは、総科に集まる人はみんなやさしくて面白くて、「異」を受け入れて融合する能力を持つ人たちで、その中で自分と同じようなお祭りオタクの人と出会えたことは本当にうれしかったです！

▼今回の取材はオンラインで行いました。



後日、片桐さんからお知らせを受け取りました！

2025年の4月24日に東広島市で「とらでいっしゅ」を株式会社化することが決定したそう！大学卒業後に地元で起業する意思は変わらず、今後2年間での事業拡大を目指してここ東広島での起業に踏み切ったとのこと。この春から本格的に始動する、ここ東広島を拠点とした「とらでいっしゅ」の活動や思いについて聞いてきました。

東広島での起業 覚悟は広島への愛から

Q. 夏の取材時から大きな一歩を踏み出されたんですね！経緯や思いについて教えてください。

ここ東広島での起業に踏み切った大きな理由に、今年度(2024年度)3つのビジネスコンテストで最優秀賞をいただき、自分のやっていることは間違っていないと自信を持てるようになったことがあるかなと思います。また、ビジネスコンテストへの応募にあたり、たくさんの人に応援してもらい、助けてもらい、背中を押してもらいました。広島は

自分の出身地ではないけれど、たくさんの方があたたかく迎え入れてくださったおかげで今ではふるさとみたいに感じていて。そんな広島に恩返しをするために、思い切って起業しようと思えるようになりました。

あともう一つ、就職活動への抗いも自分の中で覚悟を決める踏み台になったかな。同級生の中でも就活の話題が出るなどして、正直私も今まで思い描いてきていた将来への迷いがなかったわけではありません。やっぱり起業には万が一のリスクが伴うわけだし。でも、民俗芸能に人生を捧げると覚悟を決めた以上、「就活はしない！」と自分自身への意思表示を込めて起業に踏み切りました。まさに背水の陣だなと思いながら(笑)。

残された時間で 成し遂げたい挑戦

大学を卒業して地元新城市で起業するまでの残り2年間、東広島に拠点を置くからこそ成し遂げたいことははっきりしています。1つは「とらでいっしゅ」として中国地方のたくさんの祭りを支援して、中国地方の祭りや中国地方の魅力に対するディープなファンを増やしたい。そしてもう1つは、広大生を含む大学生がもっと気軽に地域の祭りに参加できる、「参加したい！」と思える環境をつくりたい。目標がはっきりしている今、あとは当たり前のように頑張るだけだと思っています。「がんばることは当たりまえ」は私の座右の銘なんです。

取材してみて

今回、友人である片桐さんに取材を申し込んだのは彼女の活躍をもっといろんな人に知ってほしい！という思いからでしたが、取材を通して私自身も改めて、彼女のお祭りに対する思いの深さや強さ、そして人生をかけた実行力に圧倒されました。友人の頑張りは一番刺激をもらえますし、多様な人材に囲まれた大学生活を送ることができる総科の環境にも改めて価値を見出すことができた気がします。

▼「とらでいっしゅ」のSNSアカウント

Instagramリンク:

https://www.instagram.com/tradish_2004?igsh=MTNjZW81Z2l6c2hhOQ==

Facebookリンク:

<https://www.facebook.com/share/1AXV2ykLg4/?mibextid=wwXlfr>

輝く総科生にインタビュー

STUDENTS ★ INTERVIEW



おおの
大野はるかさん
総合科学部総合科学科 1年

Be your self !

取材担当：森正洋
伊東亜起
木谷優花

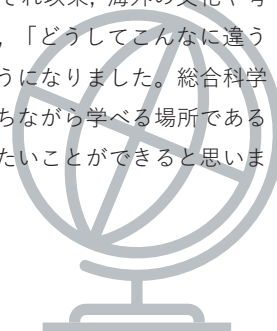
Q. なぜ広島大学の総合科学部を選びましたか？

私は高校時代に教員を目指していて、どの教科を教えた
いか考えたときに、数学が一番教えやすくて楽しいと思
いました。だから理系に進もうと考えたのですが、進路変更
ができずに悩んでいました。そんなときに先生に相談した
ら、広島大学の総合科学部なら文系でも数学を学べると教
えていただきました。「そんな学部があるんだ！」と驚き
つつ、私にぴったりの学部だと思いました。それで「ここ
に行きたい！」と決めました。私にとって大学は、「将来
の夢を叶える場所」というより「自分が学びたいことを学
ぶ場所」であるべきだと思っています。総合科学部は1年
生のうちに自分の興味を広げながら模索できるし、そこ
から専門的な道にも進めるという話を聞いて、本当に魅力
的な学部だと思いました。

海外マインド
×
総合科学

Q. 総合科学部でどんな研究をしたいと考えていますか？

私は海外の人の考え方が自分と全然違うのがずっと不思議で、その理由を心理学や文化、歴史の視点から総合的に学びたいと思ってきました。そう考えるようになったきっかけがあるのですが…。中学の頃、私はすごくネガティブな性格だったんです。でも、ALTの先生と話したときに全てを肯定されて、「こんな考え方もあるんだ！」と衝撃を受けました。それをきっかけに海外に興味を持つようになり、高校では「ハロートーク」というアプリで外国の方と交流するようになりました。初めて友達になったパキスタンの男子との会話で、日本人特有の謙遜が向こうにはあまり通じなくて、「もっとポジティブになろうよ！」と言われ、自己肯定感の違いを感じました。それ以来、海外の文化や考え方にすごく憧れるようになり、「どうしてこんなに違うのか」を深く学びたいと思うようになりました。総合科学部がさまざまな学問の視点に立ちながら学べる場所であると知って、ここでなら自分のしたいことができると思いました。



▼天気が良かったため外でのインタビューでした。



Q. 大学生活が高校と違うと思うのはどんな時ですか？

私は自分から積極的に話しかけることが得意で、思い切って声をかけてみると、意外な出会いがあったりして、そんなときに大きな喜びを感じます。「この人と仲良くなって良かったな」と思う瞬間がたくさんあって、本当に人とのつながりには日々助けられています。私にとって、友達や周りの人からもらうエネルギーがすごく大きいです。正直、友達がいないと生きていけないんじゃないかなと思うほどで（笑）。しんどいときでも友達と話すだけで元気が出ますし、学校に行く理由の一つが友達に会うことです。周りには本当に頑張っている人たちが多くて、その姿を見ると「私も頑張ろう」と思えるので、良い影響をもらっています。

Q. 今挑戦していることや、今後挑戦していきたいことはありますか？

大学に入ってから、サークルに入りました。共通の興味を持つ仲間と出会えるので、友達もできやすいです。そして最近バイトを始めたのですが、条件の良いところを選びたいなら早めに探し始めるのがおすすめかなと思います。また、同級生に誘われて、学生プロジェクト「羽ばたけ！未来の総科生」に参加することになりました。正直、不安もありますが、やると決めたからには全力で取り組もうと思っています。あとはエジプトに行きたいです。けれど、一人で行くのは怖いので、大学の力を借りて行こうと思っています。大学では挑戦でできることがたくさんあるので、まずは興味のあることに積極的に参加しています。（学生独自プロジェクト「羽ばたけ！未来の総科生」の詳細はp. 39）

2024年夏、大学の留学プログラムSTARTで念願のエジプトへ行ったそう。

現地で撮った写真をみせてもらいました！



▲スフィンクスとの一枚。エジプトらしくて素敵です！

▶ピラミッド



▲留学プログラムでは、エジプト観光のほかにも大学のラボ見学や現地料理も体験したそうです。

Q. 一人暮らしの生活について、教えてください。

生活習慣は正直よくないです（笑）。夜中の2時に寝て、朝8時にギリギリ起きる感じです。でも、大学生は本当に自由なので、友達と遊ぶ時間を優先してしまいます。サークルがない日は友達の家でゲームをしたりおしゃべりをして、夜遅くに帰ることが多いですね。ただ、やらなければならないことが増えたので、タスクをリスト化して、終わらせてから寝るようにはしています。それでも忘れそうになることがあるので、タスク管理は本当に大事だと思っています。

Q. 将来について考えていることはありますか？

将来は絶対に「人と関わる仕事」に就きたいと思っています。特に、子どもが好きなので、教師という職業にすごく憧れています。自分をこれまで支えてくださった先生方のように生徒ひとりひとりに寄り添った教師になりたいです。また、教師は生徒が入れ替わるたびに新しい出会いがあって、それも魅力的だなと思っています。



▼取材後の一枚。

Q. これから大学受験を迎える後輩たちへメッセージをお願いします。

私が伝えたいのは、「自分の好き」を大切にしてほしいということです。将来の夢や偏差値で大学を決めるのももちろん良い選択だと思いますが、大学生活を楽しむためには「学びたいもの」を見つけて、それを基にして大学や学部選びをするのが一番だと思います。もし迷っているなら、広島大学の総合科学部のように、幅広く学べる学部も選択肢に入れてみてほしいです。自分の「好き」を見つけられたら、それが大学生活や将来に大きな力になると思います。

取材してみて

今回、お話を聞き、人と関わるのが大好きだということが伝わってきました。

自分自身の好きなことにひたむきに向き合い、行動している姿が輝いて見えました。



輝く総科生にインタビュー STUDENTS ★ INTERVIEW

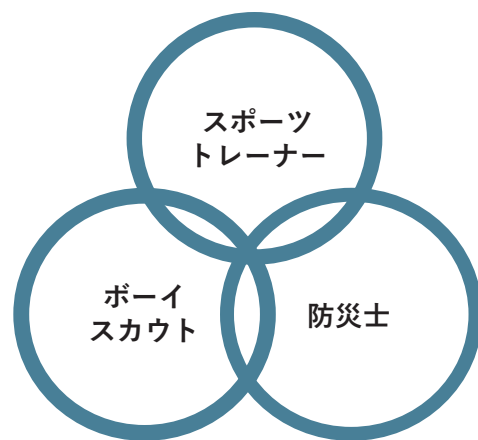


取材担当：森正洋，伊東亜起，木谷優花

Q. 総科の好きなところはどんなところですか。

総科の好きなところは、やっぱり色んな人がいること、色々な学問があることですね。自分がやりたいことだけじゃなくて、色々な方向から問題に対してアプローチできる。スポーツによる怪我をなくすためにも色々な方向からアプローチするっていう意味で総科っていうのは世界にひとつですよ。ほんまにこの学部しかないんじゃないかなって感じて。ずーっとそればかり勉強するんじゃなくて、ちょっとこれやってみようってときにその学問が学べるっていう環境はすごいいろいろですね。あと、そういうことをしたくて集まっている人がたくさん周りにいるんで、そういう人たちと交流できることもほんまに楽しいなって思います。あと留学生が沢山いることも。やっぱり楽しいですね、総科は。総科ってなににするんってよく聞かれるんですけど、なんでもできるなっていうのが答えだと思う。

Enjoy Challenging ～迷ったらGO～



▲石藤さんの総合科学的3軸

Q. 具体的にはどのようなスポーツに関わってきたのですか。または関わっていききたいと考えていますか。

もともと僕、中学・高校で陸上競技をやっていて、中学の時に怪我をしてしまったから、スポーツ選手のサポートをする職業に就きたいなって。過去の話になるんですけど、中学校の時から陸上競技部の練習メニューを作るようになりました。そこから中学校の軟式野球部で、走力向上のためにプロデュースする形でお世話になるようになり、そこから高校野球のトレーナーのような形でやらせていただきました。大学に進学してからはアメリカンフットボール部の戦術分析スタッフをやっています。あとは、自分の軸として陸上競技というものが今まであったので、陸上競技を勉強しつつ、水泳選手の身体の作り方はすごい面白いなって思っているんで、水泳も勉強しつつみたい形でやっていきたいなというところです。今は陸上、アメフト、水泳、野球の4種目に関わっていますが、スポーツを限定することはしたくないんで、これからいろいろなスポーツに触れていきたいなっていうのはあります。

Q. 広大の総科を選んだきっかけを教えてください。

僕は将来、スポーツや部活動による怪我をなくしたいと思って広大の総科に進学しました。特に、スポーツバイオメカニクスという学問があるんですけど、それを研究している進矢先生、スポーツ心理学の関矢先生、スポーツ生理学の長谷川先生、理学療法士の田中先生と、自分の興味がある分野の研究をしていらっしゃる先生が沢山いらっしゃったのが決め手になりました。

僕は今まで6年間、陸上競技をやってたんですけど、陸上競技には和田先生がいらっちゃって。あと、僕はスポーツの怪我をなくすためには、理学療法士やトレーナーといった沢山の職業があるんですけど、色んな方向からその怪我に対してアプローチすることが大事だと思っていて。例えば、心理学的なメンタル面からのアプローチがあったり、理学療法士みたいにフィジカル面からのアプローチがあったり、沢山のアプローチがありますよね。その多角的な感じが総合科学部の紹介で掲げられていた「学際的」というワードに重なるなと思って、ああ、僕に合っているなと感じました。

あと僕は、スポーツ以外にも12年間ボーイスカウトの活動をしてきました。ボーイスカウトはキャンプやハイキングのような野外活動、その他にも募金活動やゴミ拾いのような社会奉仕活動をテーマとした活動なんです。また防災士の資格も勉強して取得し、災害が発生した時にどういうふうに行動するかというのを日頃から住民の方に伝えると言った活動もしてきました。だから、スポーツは人間探究、ボーイスカウトは社会探究、防災士は自然探究と言う風に、僕が軸として頑張ってきてこれからもやりたいことが全てできる学部だと思い、広大の総科に進みたいと思うようになりました。



▲トレーナーとしての活動の様子。



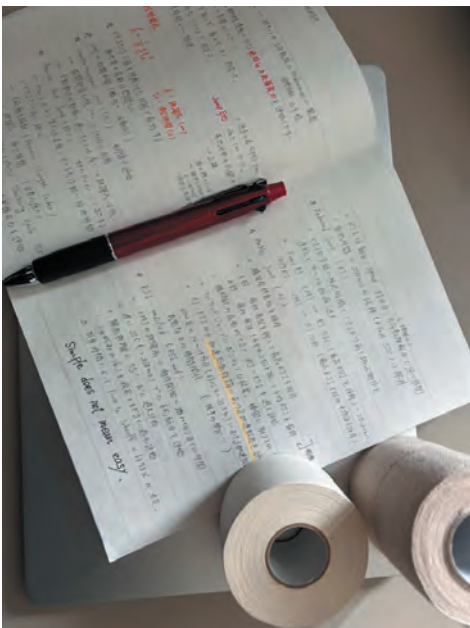
▲ボーイスカウトで戦術分析。

Q. ボーイスカウトや防災士の資格取得はどのようなきっかけから始められたのですか。また、今の目標などあったら教えてください。

2026年に「日本ジャンボリー」というボーイスカウトの祭典が広島で開催されるのですが、今はプレ大会の実行委員として活動しています。今まで自分自身がボーイスカウトの活動を楽しませてもらってきたので、逆に誰かを楽しませる側としてしっかり準備したいというモチベーションがあります。今、スポーツトレーナーでもボーイスカウトでも、前に立って誰かを支える役割ではありますが、だからこそ楽しむことが一番大事なんじゃないかなというふうに感じています。自分自身がたくさん楽しんで、ボーイスカウトってこんな楽しいんだよってところを伝えたいです。僕の活動の目標に日本アルプスを縦断するということを掲げていて。日本アルプスを縦断したいとか、日本一周したいとか、色々目標は尽きません。防災士の方は、僕の父が消防士で東日本大震災だったり、熊本の地震だったり、北九州の豪雨だったり、そういうところに何ヶ月か派遣された話を聞いて、必然的に防災に興味関心を持つようになったのかなと思います。



▲夏に行った取材の後で、念願だった北アルプスの燕岳に登ったそうです！



◀分析ノートには字がびっしり。

Q. いろいろな活動をする中で、心がけていることはありますか？

“Enjoy challenging“, やっぱり何事も挑戦することと、どこまでいっても楽しむことっていうのは大事だと思って。今スポーツを勉強しているのも好きでやってるし、好きだからこそチャレンジしたいんです。

こういう風に思えるようになったのも、今まで成功したことの10倍くらいは失敗してきた経験のおかげかなと思っています。中学・高校でも部活のトレーナーをやらせてもらっていましたが、最初はトレーナーの立場として自分の思っていることをしっかり伝えることばかりに集中してしまっていて、チームがうまくまとまらないことや喧嘩で意見が割れることもたくさんありました。そこから選手との距離が近いトレーナーだからこそ、“謙虚さ”がどれほど大事なのかに気づきました。学生としてこのことを経験できたのは大きかったなと思います。

Q. 大学生活は高校の時とどんなところが違うと感じていますか。

友達とエンジョイする時間が増えましたし、自由な時間ができてチャレンジする機会も増えました。だから自分の本当にやりたいことができるようになったなってすごく楽しい。言葉通り、「充実」しています。

Q. 総科の好きなところはどんなところですか。

総科の好きなところは、色んな人がいること、色んな学問があることです。自分がやりたいことだけでなく、色々な方向から問題に対してアプローチできる。スポーツによる怪我をなくすための様々なアプローチをひとつの学部の中で学べるこの場所は本当に世界にひとつですよ。ずっと同じことばかり勉強するんじゃなくて、ちょっとこれやってみようってときにハードルなくその学問が学べる

環境はすごくおもしろいです。あと、そういう学問の飛び越えをしたくて集まっている人がたくさん周りにいるので、総科内での出会いや交流が本当に楽しいです。

留学生が沢山いるこの環境も僕にとっては総科を総科らしくしている1つの要素で。この前は、IGSの友達がカレーをふるまってくれて、辛いって言いながら食べたのがいい思い出です。

「総科ってなににするん」ってよく聞かれるんですけど、なんでもできるっていうのが僕の答えです。挑戦できるのが総合科学部だっているのは思っています。これから先、色々な視点から物事を見ていくのは大事だと思うので、その能力を鍛えていく学部なんだろうなと。

Q. 総科でこれから何をしたいと考えていますか。

将来僕はプロスポーツトレーナーとして活動していきたいなというふうに考えています。やっぱり大学に入ってから、さまざまな専門家の方や大学の先生とお話をさせていただく中で、世界が広いなっていうことと、簡単には答えは出ないということを感じていて。これからスポーツトレーナーとして活躍するためには、いろいろなことを知ってないとアプローチ方法が見当たらないというか、いろいろな学問を知っておく必要がある。そういうふうにしたので、いろいろな学会に参加したり、研究者のお話を聞いたり、あとは僕自身がいろいろなスポーツを経験したりスポーツを経験している人たちの話を直接聞いてみたいなっていうところがあります。そういうことを1年生のうちに、特にやっていきたいなというふうに感じています。

取材してみて

お話を聞きながら、どんなときでも初心に帰り、ストイックな姿勢を貫くことは忘れてはいけないと感じました。



▼1年生3人組でパジャリ。
憧れの陸上選手である大迫選手がロッカーの番号などなんでも「1」を選ぶと知って石藤さん自身もいつでも「1」を選ぶそう。

総合科学部 創立50周年 記念式典



2024.08.10

今号の卒業生インタビューでは、記念式典に参加した編集員が卒業生の方とお話した内容をぎゅぎゅっとまとめました！

卒業生にインタビュー

総合科学部で良かったことは？



Q

総合科学部で良かったことは何ですか？

A

総合科学部ならではの様々な価値観をもった学生との交流は、自分の価値観を柔和にさせてくれました。卒業後の進路も多様なので、異なる職業に携わる人がもつ考え方を知ることのできる環境だと思います。また、珍しい学部ということで、初対面の方との話題になるのも助かっています。



A

なんでも出来る、なんでもやるんだというマインドを持てていること。



A

仲の良かった友達の専門が違って、色々な分野の人との関わりがあること。



Q

在校生にひとことお願いします。

A

知ることによって新たな解決方法を生み出していくところがいい。浅く広くにコンプレックスを持たないで！スマホに答えはない、目の前の人間を見て。



A

学生時代は一度だけ大いに悩み楽しんでください。自分を信じて。やらずに後悔より、やって反省。



A

あっという間に大学生の期間は終わってしまいます。そこで出会った人たちとの縁を大切にすることで、助けられることは多いと思います！

